

ひの
つかい
日 使 考

福 原 敏 男

はじめに

- 一 春日大宮・若宮の祭
 - 二 東大寺八幡宮転害会
 - 三 離宮八幡宮日使頭祭
 - 四 宇治田原三社祭
- おわりに

論 文 要 旨

筆者はこれまでに、祭礼芸能である一つの・細男について考察し、これを平安末期に成立した田楽・王の舞・獅子舞・十列・巫女神楽・競馬・流鏑馬・神楽・舞楽・神子渡等からなる一連の芸能として位置づけた。京都・奈良の古社の祭礼において、「日使」と称する役が、上記の諸芸能とともに、祭礼に参加する事例がある。

従来の日使に関する先行研究は、春日若宮祭礼に限られ、ここに神聖性が指

摘された。日使は黒袍表袴に長い裾をひいた姿で、奉幣を主な役割とし、芸能的所作がないからであった。本稿では、春日祭・春日若宮祭礼、東大寺八幡宮転害会、大山崎離宮八幡宮の日使神事、山城宇治田原三社祭に参加する日使を対象にした。史料と絵画に基づく検討の結果、日使の成立を楽人の風流に求めた。日使が伝播した地における宗教性は、その所役を荷った人々の階層の問題である。

はじめに

筆者はこれまでに、祭礼芸能である一つもの・細男について考察し、これを平安末期に成立した田楽・王の舞・獅子舞・十列・巫女神楽・競馬・流鏑馬・神楽・舞楽・神子渡等からなる一連の芸能として位置づけた⁽¹⁾。本稿において、対象とする「日使」と称する所役も、京都・奈良の古社の祭礼に登場する。

現在、日使は春日若宮祭礼と南山城の宇治田原三社祭に参加する。若宮祭礼においては黒袍表袴に長い裾をひいた姿で(図1)参仕し、祭礼行列の中心であるとの見方がある。また、日使は奉幣が主な役割であり、以前論じた一つものと同様に、芸能的所作がほとんどないところから、ここに神聖性を見出す見解がある。

例えば、大東延和は春日若宮祭礼の日使をこのように解釈する。⁽²⁾春日若宮は藤原氏祖神の天児屋根神とその比売神の御子天押雲根命をまつるが、この若宮は蛇体の水霊神^ニ農業神でもあった。若宮創立以前の長承年間(一一三二―三三)には非常に雨が多く、全国的に洪水飢饉に見舞われ、悪疫が流行した。これが若宮を祀ることになった原因の一つであった。このような世情を背景とし、日使には晴を祈る太陽の意味がこめられているのである。

大東は同時に日使を政治的にも解釈しているのである。『春日大宮若宮御祭禮図』によれば、保延二年の祭礼創始年に参向した藤原忠通は、



図1 春日若宮おん祭絵巻(春日大社蔵)

急に体調がすぐれなくなり、楽人に装束を貸し与え代行させた。氏はこの話を次のように解釈する。⁽³⁾

若しこの話のように急病代参が事実ならば、翌年以降において参向すればよいものをその事実もなく、ずっと楽人による日使なのである。どうもこの話の裏には、藤原摂関家の祭礼関与を敬遠した衆徒側の巧妙な意図が隠されているように私には思えてならない。

この説は、若宮祭礼の創始を、春日神社の祭祀権獲得を狙った興福寺衆徒の政治的策略であるとする永島福太郎⁽⁴⁾説を踏まえている。以上のよう到大東は「日使」を、宗教的に、政治的に解釈しているのである。

また、三隅治雄は先述した忠通の代理説話をこのように解釈する。⁽⁵⁾

氏の長者たる者、衆徒ごときに一度押さえられたからといって、その屈辱の扱いを唯唯諾々と永却認め続ける寛容さをもちえたかということである。むしろ、「日使」の名には、古き代より日顯ちの常世神を氏神と仰ぎ、その日の輝きをつねに春日山から平城の都にさし当て、日の御子である天皇を守り育てたのはわが藤原氏との誇示が込められていて、それを使者に名のらせることで、表面は興福寺に譲りながらも、その実、この祭りの主はわれなり、との自負を示す気概が裏にあったのではないかという気が、わたしにはする。

現実には、祭り当日の昼下り、興福寺南大門前から春日神社の一の鳥居をくぐり、影向の松の下を通過して若宮お旅所へと向かう数百人の大行列の先頭を、十列児に先導させながらいく日使の騎乗姿は、黒の束帯に、冠には藤の造花をさし、陪従が鶴のかざりのついた風流傘をさしかけるといった、きわめて優雅で気品高いもので、たとえ代理の伶人とはいえ、藤原家の栄光と権威を万余の見物人に誇示するに充分なものがあつた。

春日若宮祭礼は興福寺が主宰した、というのが現在までの研究の成果であるが、三隅は日使を藤原氏の氏神に永遠の太陽神の象徴と解釈する。祭礼芸能研究の権威である三隅の解釈は日使神聖説を定説化している。

そこで必要なのは、日使という祭礼の役を現時点で可能な限り検討することである。勿論、個々の祭礼には、それ自体完結した体系があり、祭礼所役もその祭礼によって様々な意味がある。たとえ、所役の形や名称が同じでも、それを支える寺社組織が違えば、所役の意味も違うことは明らかである。

しかし、個々の祭礼における日使の意味を考えた上で、各事例を比較した時、日使の本質が浮かびあがってくるものと思われる。その上で、大東や三隅による春日の日使解釈が妥当であるか、それが他の事例にも敷衍できるか、等が判断できるのである。

一 春日大宮・若宮の祭

春日若宮祭礼では、現在にいたるまで日使が行列に参加し、御旅所において御幣を奉り、祝詞を奏上する。現在は神社の関係者が交替でこの役を奉仕しているが、明治維新までは南都の楽人が勤めていた。

この行列は、中世よりあまり変化がないと思われる。『大乘院寺社雑寺記』長祿元年（一一四五）一一月二六日条にはこのように記されている。

若宮御祭行列次第

祝 御幣

舞人十人、日使

陪従 巫女

細男二村、猿楽二村、

馬長頭

(中略)

競馬五隻

流鏑馬

(中略)

田楽頭

『蓮成院記録』二、天文二年(一五三三)二月二七日条には、「日使御前へ参時中門正面ノ埒ヲ開テ退出之後如本押閉ヘシ、」とある。御前での奉幣が終わると、旅所正面の埒を開けて退出するとあり、これは現在の祭式と少々異なるが大筋は踏襲している。

さて、春日の日使の初見史料は、若宮祭礼ではなく、大宮の春日祭である。⁽⁷⁾

春日祭は上卿と弁がこれを奉行し、藤原氏の氏長者の祭祀のほかに官使の近衛使・内蔵使ないし中宮使が参向し、奉幣する二季(二・一月の上申日)の祭である。斎女(まもなく内侍)の参仕が加わり、その参向には国・郡司の儀杖が整えられた。

『春日社記録』『旧記勝出』天承元年(一一三一)二月五日条に「御祭、日使ハ檢非使別當眞行次男少将、」とあり、二月の春日祭に檢非違使別當の次男が日使を勤めている。

また、『中臣祐明記』建久四年(一一九三)二月四日条にはこのように記されている。

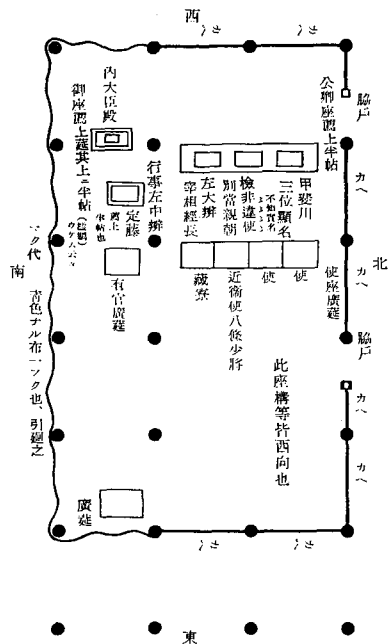


図2

奉行弁九条権右少弁、内侍加賀内侍、分ハイノケヒシ大夫属、日使唐橋官少将実名不知^(倍) (檢非違使)

『尊卑分脈』によると、この唐橋は、久我雅通の次男で唐橋の祖通資であろう。春日祭における檢非違使随行の様子として、『中臣裕賢記』弘安三年(一二八〇)二月一二日条の春日神社着到殿の指図を掲げておく(図2)。

これを見ると、行事が左中弁定藤、内大臣、左大弁、檢非違使別當、近衛使などが参仕している。

『江家次第』巻五「春日祭使途中次第」の細註によると、平安末期には藤原宗家の人々が近衛の中將または少將として春日祭使を勤めることが重視されていた。同書によると、その一行は舞人一〇人、陪從六人、加陪從六人、櫛官人二人、番長二人、隨身、共人、馬副等からなっていた。

ところで、同時代の春日祭と検非違使に關係する儀礼で思い浮かぶのは、春日神社と奈良坂で行われた盗人拷問の儀礼である。この儀礼については、後藤淑の「奈良坂芸能註」⁽⁸⁾に詳しく、氏の所論を参考に春日祭における検非違使と日使の關係を検討しよう。

この儀礼に關する断片的記事としては、『中右記』嘉承元年（一一〇六）十一月七日条に「今日、春日祭使出立（中略）、九日天晴早旦出_レ南京、晩頭着_レ淀。奈良坂并淀作法、給_レ禄、皆存_レ旧規」とあり、一月の春日祭の帰京において「奈良坂并淀作法」があったという記事である。『江家次第』卷五「春日祭使途中次第」には詳しい記事が載る。

社頭事訖馳_二御馬_一、使馳_二引馬_一、隨身騎馬在_レ前、舞人等馳_二、歸來解_レ紐放_レ髻、隨身同放_レ之、著_二梨原_一終夜醉遊、頭中将召_二大夫判官_一曰、御前辺狼籍、恐有_二犯人_一、可_レ搦進、即搦_二府下部一人_一為_二犯人_一、問_レ之、盗人申云、盗犯已実、贓物有_二使君御衣櫃_一、隨_二申給_二衣櫃_一、預納_二禄凡絹_一、官人等分取、西日朝官人等戲設_二飭馬_一、〔以_レ脱力〕馱_二為_二馬_一、以_二蓬_二為_二雲珠_一、以_二土器_一為_二李葉_一、載_二無_二衆望_一下部一人嘲_二哂_一之、次歸京、至_二不退寺之辺_一之間、又搦_二盗人_一令_レ申_二贓物_一如前、今度預納_二掛・単衣_一、分取如前、次引_二落大夫判官_一、每_レ人兩足蹴_レ之、次到_二淀立_二雷鳴陣_一、官人以下皆著_二笠負_二胡錄_一、〔錄〕府下部一人令_レ著_二紅衣_一、稱_二雷公_一曰、為_二春日明神御使_一所_二送申_一也、依_二此可_レ至_二大臣大将_一給_二、次官人以下給_二禄_一、次歸京作法在_二別、無_二纏頭制_一之時、至_二于共人_一脱_二衣給_レ之、纔著_二狩衣_一指貫許_二歸、奈良坂一度、淀一度、知_二故実_一之者、為_二免_二一_一所役馳_二歸、昔尾張兼時於_二奈良坂_一預_二禄_一之後、於_二不退寺前_一作_二詩曰_一、潮声承_二キ_一讀_二岐大粮使_一天_二楊色見_一不退寺前_二天_一、因_レ之人人更纏頭、小一条大將為_二使、脱_二黒貂裘_一給_二兼時_一、後有_二悔氣_一、上代以_二此裘_一為_二重物_一之故也、兼時得_二其心_一後日令_二人_一売_レ之、

春日祭の社頭の儀が終わると、馬場において走り馬が行われる。この後、祭使一行は梨原の宿院に還って装束を解き、終夜酒宴がある。頭中将が大夫判官（検非違使尉）を召して、狼籍の恐れがある犯人を搦め捕らえろ、と命じた。大夫判官は下部の一人を犯人として、これに問うた。下部は自分は無罪であり、盗品は大夫判官の衣櫃に隠されていると言った。申告によって調べると、禄の絹が出てきたので押収した。

西日には、人気のない下僕を飾馬に乗せて嘲弄したり、歸京途次に不退寺辺りで、盗人を搦め捕らえ、盗品のありかを言わせる儀礼は前の如しである。今度の盗品は掛・単衣で前の如く押収した。次に大夫判官を引き落として、皆で足蹴にした。淀に到ると、雷鳴の陣（雷除けの鳴弦）を張り、下部一人に紅衣を着せて、雷公と称して、春日明神の使いとして神送りをした。

以上が不退寺辺りと淀の儀礼で、奈良坂の儀礼はまた別にあつたらしい。

検非違使が犯人であつたという風刺劇は『玉葉』治承二年（一一七八）十一月二日条にみえる。

於_二奈良坂_一有_二札_一盗人_一事、路西有_二小川_一、道東留_二馬_一、向_二、行頼師武付_一口、自_二路西辺_一谷方、舞人武宗称_二大夫判官_一、著_二赤衣_一、乍_レ騎_二馬_一參_二使馬前_一、舞人兼茂称_二看督長_一、帶_二白羽矢_一、取_二弓出来_一、其後持_二參犯人_一、下部二人引_二張_一之、看督長勘_二問_一之、申_二不_レ犯_二之由_一、引_二入其身_一之後、称_二盗人妻_一之者又持_二參了、召問_二之処_一、申_二可_レ被_二問_一夫之由、仍重勸_二問夫_一、猶不_二承伏_一、仍及拷問_二之時承伏_一申云、犯用之贓物在所、和泉前司所_レ知也、又大夫尉所_レ知也云々、即引入了、召_二庁頭_一給_二禄絹_一、

春日祭に参仕した京都の舞人陪従が、帰途、奈良坂で盗人を糺すという風刺劇を演じたのである。この内容は、以下の通りである。先ず、舞人武宗が大夫判官（検非違使尉）となって、赤衣で登場する。次に舞人兼茂が看督長となつて、白羽の矢を帯び、弓を持って登場する。次に下部二人が犯人を引き出して来る。看督長が犯人を勘問する。犯人は無実を言い張る。そこで、犯人の妻を引き出し勘問に及ぶ。犯人の妻は、全く知らないで、夫に尋ねてくれ、と言う。再び犯人を引き出し勘問したが白状せず、拷問に及ぶと、ついに意外なことを白状した。盗品は和泉前司が知っており、大夫判官も知っている。と言って退場した。本府の幄に着して、雷公の儀がある。舞人が三人、冠の上に桎笠をつけ、剣を抜き前庭をめぐる。そのなかに、赤衣を着たものが一人でてきて鈴を振り、自分は雷公であると答える。

後藤は、『玉葉』の他の記事により、舞人武宗と兼茂を近衛官人と指摘している。

また、『山槐記』にも関連する記事がある。保元四年（一一五九）二月一日条に、春日祭に京から祭に参仕した陪従たちが春日大宮の東南庭に立ち、舞人等は南門に出て、騎馬で冠老懸を撒き、続松をとり、「称有盗人馳馬横行往還、是例事也」とある。舞人が騎馬で松明を持ち、盗人だと呼び、馬をはしらせ横行した、これは恒例の事である、というのである。同記録翌一二日条には、「今日於奈良坂擄盗人拷問、是先例也」とある。後藤によると、⁽¹⁰⁾ 一日に盗人だと呼ばわって舞人が馬を馳せ、その盗人を翌一二日に奈良坂で捕え拷問する、という記事は、一連の儀

礼であり、かつての事件が儀礼化された可能性があると言う。

さらに、『台記別記』仁平元年（一一五一）二月一三日条には「於淀有御衣櫃索事并雷鳴事 近例於奈良坂有御衣櫃索事」とあり、盗品を衣櫃に探す儀礼と春日の使いである雷鳴の儀礼が淀と奈良坂であったことがわかる。

春日祭における社頭の盗人儀礼のほうは近世まで記憶されていたらしく、『春日大宮若宮御祭禮図』に記されている。

春日大宮御祭礼七ヶ日終（住吉へ中夜丑の刻にて神馬を牽申下部高声にて）

強盗よ／＼と申其節神器をとり納むよし天和年中相改りしよし近き頃まで古老乃神人南門より南に向ひ中音にがんだうよ／＼と云立より相尋しに故実也といひすて去る江家次第に盗人の事あり

後藤の所論は、盗人拷問の儀礼が奈良坂、淀といった境界における儀礼であり、実際の群盗禍が行事化し、芸能化したものという結論であった。いずれにせよ、春日明神の神威（雷公＝春日明神の使い）によって盗賊が退治されるというテーマが儀礼化したものであろう。

以上の儀礼を長々と引用としてきたのは、春日祭に参向した祭使と衆人の関係を確認するためである。『江家次第』、『玉葉』、『山槐記』共、近衛官人の舞人が儀礼の主役である。先述したように春日祭祭使一行の一人を日使と称する史料があり、日使と舞人・衆人が近い位置にあったことを指摘しておく。

さて、若宮祭礼の日使はどのようにして成立していったのであろうか。先ず、若宮祭礼創始の保延二年（一一三六）の様子を『若宮祭禮記』同

年九月一五日条にみておこう。

祝申後取使幣、十列馬曳立祝申、向南庭返祝申畢、立幣事、(興福寺別当一乗院玄祝)
(藤原忠実)
 次皇后宮、次大殿下、次□臣殿、次中宮、(藤原忠通)
 次関白殿下、次北政所

興福寺別当以下が奉幣しているが、官幣には預からない。「取使幣」の使は、官使ではなく、藤原氏の使いであらう。

『若宮祭禮記』保延三年(一一三七) 九月一七日条にはこのように記されている。

以寅時祐房祝申、奉渡旅所、随旅所乱聲、以巳時舞人渡、次使、(後略)

使は舞人の次に渡御している。以下、『若宮祭禮記』より、祭使の特徵的な記事を列挙するとこのようになる。

保延五年(一一三九)「使幣祝申」

保延六年(一一四〇)「使幣□」

永治元年(一一四二)「使友光、(府)苐生舞人、」

康治元年(一一四二)「使幣」

康治二年(一一四三)「使光則太郎苐生其幣」(府)

久安二年(一一四六)「使苐生行時」(府)

久安四年(一一四八)「御祭使四良苐生季時」(府)

久安五年(一一四九)「使行光志嫡男、不知名、左近苐生也」(府)

久安六年(一一五〇)「使行則嫡男苐生狛行成、」(府)

仁平元年(一一五一)「使宗苐生」(脱アルカ)

使は奉幣の祭使であり、苐生(檢非違使庁に属する六衛府の下級職員)が勤めている事例もある。『楽所補任』・『楽所系図』によると使は狗氏が勤めていることがわかる。

ところで、『中臣祐定記』嘉禎二年(一二三六)の記事をみると、若宮祭礼の九月一七日の祭日が興福寺の神木動座や社寺閉門という実力行使によって一二月一七日に延期している。同記録同日条をみると、渡物の後、官幣が立てられている。

一官幣立事、依度々閉門報謝、自今年毎年不關可被奉、子細且見以前之長者宣等、申剋下着、御使右兵衛苐生貞延云々、神殿寺請取御幣、祐定祝申、不及返祝、送文在之、

大東延和はこの記事を、興福寺が「神木動座や社寺閉門という実力行使に対する報謝に名を借りて、春日祭同様若宮祭を官祭に昇格しようとした」と解している。官使は右兵衛苐生貞延であり、別に日使もお渡りしている。

『中臣祐明記』建久四年(一一九三) 九月一七日条には若宮祭礼の「渡物次第」の先頭は「楽人日使」とあり、若宮祭礼史料における日使の初見と思われる、楽人が日使を勤めている。同書翌一八条にはこのように記されている。

渡物次第

楽人日使 巫女 伝供御供 一切 細男 猿楽 競馬 流鏑馬 田楽 雖然
 競馬・流鏑馬依雨一騎許射、於渡物皆渡了
 次日、競馬九番 流鏑馬九番 同相撲九番令逐了

平安京で左方の樂を受けもつた貊氏と南都との關係は、以下の如しで

ある。⁽¹³⁾ 狛氏は高句麗の家系といい、第五代聖行が冷泉天皇の時（九六七〜八）に興福寺の雑掌となり、名人の第九代光高（九五九〜一〇四八）の代に山城国狛の里に住んで舞楽・伎楽を支え、一条天皇のとき狛の姓を賜ったといわれている。のち南都に移り、分流として永く楽家として栄える。光高の活躍した長保年間（九九九〜一〇〇三）頃に南都の楽人を糾合した南都楽所が成立した。南都楽所の伝承では、その始祖光高の五代の子孫、狛光時（当時四八才）が保延二年に初めて日使を拝領したというのである。

祭礼行列における日使の役割をみると、『春日大宮若宮御祭禮図』『南大門交名之圖』（図3）には、南大門の衆徒と日使が対峙しており、陪従伶人一人は高麗笛を、他の一人は筆簾を懷中より取り出して吹いている。祭礼行列のクライマックスである影向の松の前に、行列のなかで最初に止まるのは陪従の騎馬の楽人二人である。日使は影向の松の前を素通りするが、赤袍の陪従の二人は馬の頭を松に向けて並列し、一人は高麗笛を、他の一人は筆簾を懷中より取り出して吹く。この曲は高麗楽で、音取りの一種の「小渡し」という短いものである。

御旅所につくと、日使は中央で奉幣をするという重要な役を演じている（『春日大宮若宮御祭禮図』『御旅所奉幣并切罫之圖』（図4））。

同図の松之下渡り行列における十列之児（伶人四人）・日使・陪従（伶人二人）までを、日使を中心とした一団と考えることができる。

『多聞院日記』天正一十七年（一五八九）十一月二三日条には日使差定についてこのように記されている。

祭礼伶人方日使交名可有注進旨、以堂達伶人一臆方へ尋ニ遣了、則注進状云、

差進 若宮御祭礼日使役之事
少志 秀治

右所任例年差進之状如件、

天正十七年七月一日伶人一臆
弘葛

天正一十七年七月一日に、日使として少志の秀治が差定されている。七月一日には田楽・馬長・競馬・細男の頭役も差定するしきりである。日使の差定状は、「堂達」が興福寺別会の五師に届け出る所役申請である。『多聞院日記』同月一四日には、日使廻請が堂達に渡されている。

『蓮成院記録』二、天文二年（一五三三）十二月二七日条にも、

日使廻請之事以堂達ヲ折紙ノ書状ニテ舞人方へ可相尋也、仍其躰注進之間、成廻請渡堂達者也、今度幸ニ舞人來問、於別会所可信奉之由申候處後例不可然由申候間遣之畢、

とあり、興福寺堂達が楽所に折り紙の書状の日使廻請を以て注進し、差定を記されて、堂達に返されるのであろう。

岡本彰夫が紹介した⁽¹⁴⁾ 狛近兄筆『春日若宮祭禮故實之記並古例ヲ書出シ子孫ノ覚』（大正末年〜昭和初年写）には江戸時代の日使差定状が記されている。

差 進

若宮御祭礼日使役之事

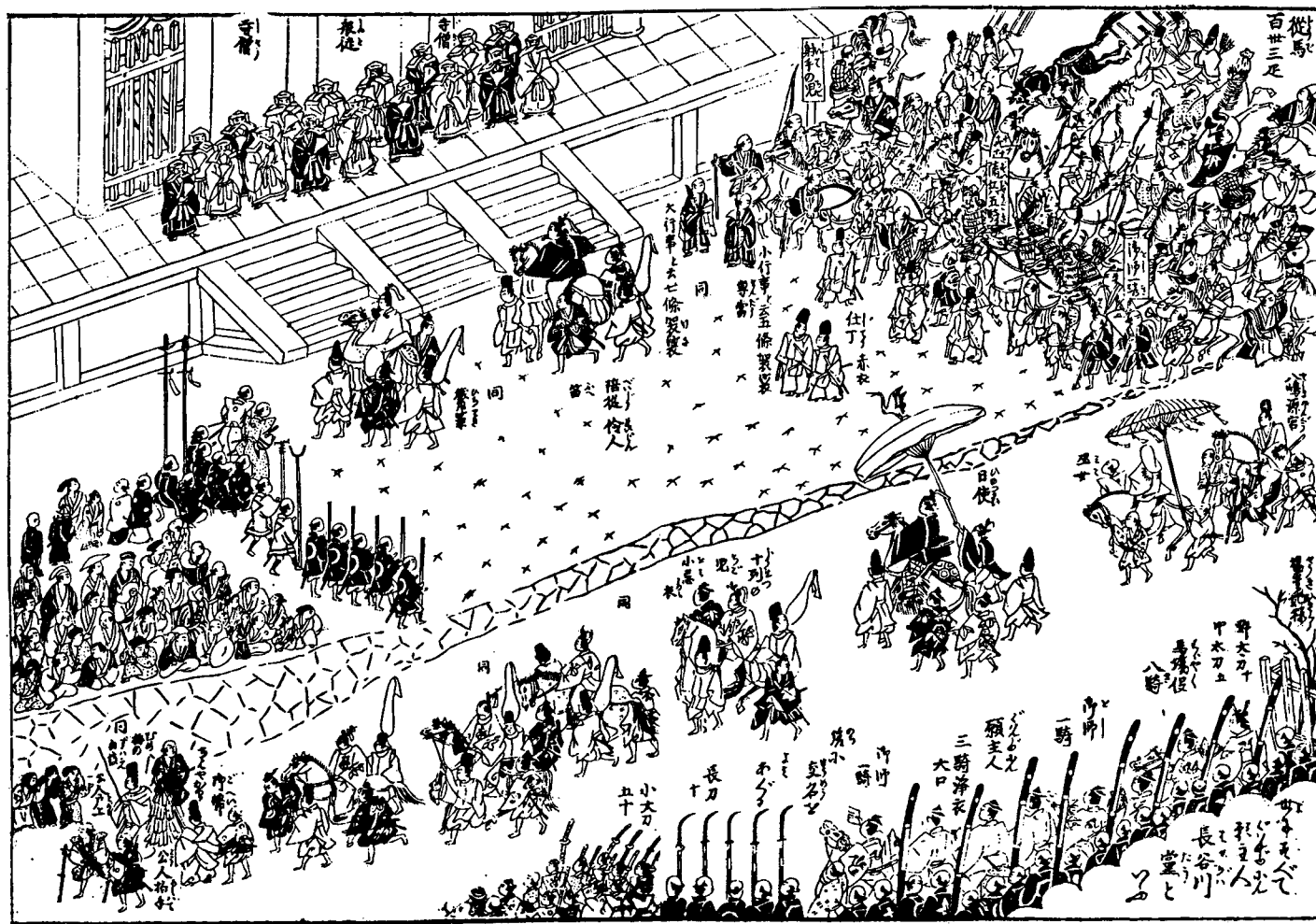


図 3

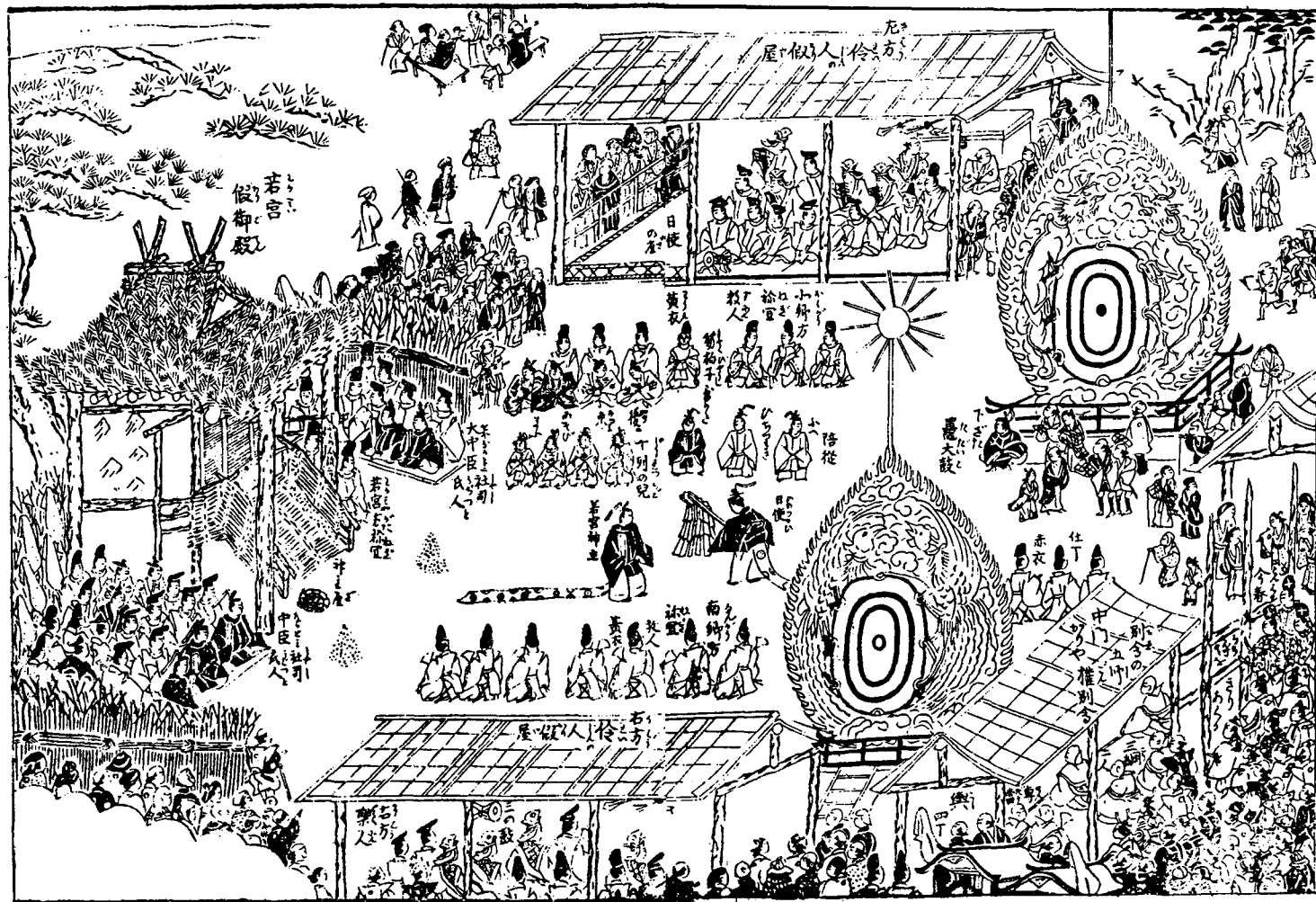


图 4

少志 近繁

右所任例年差進帖如件

文化四丁卯年七月一日

楽所一 藤代

窪 伊賀守

岡本によると、この近繁は七才であり、同書別項にはこのようにある。

尉分卜者 当時二十人 左右共ニ初参之輩也

少志卜者 当年十八人 左右共日使相済ヨリ初参込ノ人躰

物師卜者 書生物師相済日使込ノ人也

初官込ヲ冠者共号ス

楽人には、尉分―少志―物師―書生物師という臈次があり、物師より少志になるには日使を勤めるのが通過儀礼であった。岡本によると、日使が物師のなかに適当な人体のない時は少志や尉分をあわせて、御神前（楽所の守護神ニ氷室神社）で「振上げ」をして決定した、と同書にあるという。また、この「振上げ」の結果はこのように記されている。⁽¹⁵⁾

弘化四年 日使之人体無之依ル

十一月朔日 於社頭ニ振上ク服者ハ

相除左右少志

振上ケ 中 章愛男

少志 季曉^(秀) 当四才

日使振上ケ之例

安永二巳十月三日振上ケ

人数二十七人 当り葛清

同三年十月十八日 好近江当ル

同五年九月晦日 光尚ニ当ル

宝曆六年霜月 葛宗江当ル

天保十一年八月廿一日近範江当ル

左右少志迄態人後四十二人振上ケ

天保十三寅十月十一日 尉分近習ニ当ル

岡本によると、天保五年は友秋、六年は近敬がいずれも四才で日使を勤めているところから、四才位の稚児が物師の臈次であると推定している。『多聞院日記』に記された中世末期の事例では少志が日使を勤めているので、日使の性格も変化したのかも知れない。岡本も疑問にしているように、数え年四才の稚児に奉幣や祝詞奏上の能力があったとは思えず、代役が不可欠であったであろう。

本節の要旨を整理しておこう。春日祭の日使は、官幣使の随行であった。若宮祭礼においては、これとは別に藤原氏の私幣を奉ずる使があった。官幣が奉じられる春日祭には大和国に所課が命じられる。そこで、興福寺は若宮祭礼にも官使の奉幣を望んだが、実際の官幣は史料的には嘉禎二年の事例が知られるにすぎない。全く別に成立していた若宮祭礼の奉幣使を、春日祭の官幣使の随行に習い、興福寺側が日使と呼び始めたのではなかろうか。建久四年（一一九三）には、すでに日使は南都楽所の楽人が勤仕しており、日使一行は祭礼行列における楽人風流であった。

一一 東大寺八幡宮転害会

東大寺八幡宮転害会は、九月三日を式日とし、東大寺の西面の大門である転害門を中心に行われた。祭礼は神事と賑神行事に分かれる。⁽¹⁶⁾ 神事には八幡宮の神主と神人が会行事の命に従ってこれにあたった。賑神行事は検校を上首として一四人の頭役が定められ、これを催行した。この一四の所役に、上司・下司と称するものがあるが、これを日使とする史料がある。『永正二年手書会記』⁽¹⁷⁾には、このように記されている。

一、日ノ使之事、上下之頭人致其沙汰。

上司ハ赤キ装束。下司ハ青キ装束。笠ト装束等ニ倉ニ在之。
時之奉行被_レ出也。此上下頭ハ、公人中之外ハ不_レ可_ニ相勤_ニ者也。
此日之使事神秘也。聊モ不_レ可_ニ有_ニ口外_ニ也。旧記別紙在_レ之。

其恐_レ。

日使は東大寺の公人が勤める神秘的な所役であったようである。

和田義昭は「上司・下司とは神事を手伝った役であるが、中世になって風流化したものと考えられる。」と推定しており、⁽¹⁸⁾これは東大寺八幡宮の問題だけでなく、日使の本質を考える際の重要なヒントになるものと思われる。

この上司・下司は東大寺の諸職のなかで重要な職であり、永村真によると、その変遷は以下のようなであった。⁽¹⁹⁾ 東大寺の寺家経営を支えたのは寺家に従属した俗人集団であり、『東大寺統要録』『東大寺拝堂用意記』

には、「諸職」のなかに「上下職掌」がある。東大寺の俗役の起源は創建期まで遡り、『東大寺要録』『雑事章』によると、寺家に施入された「奴婢二百口」から、「供仏施僧之事」を預る「上司職掌」、「造寺」と「歌舞音楽之曲」を司る「下司職掌」が生まれ、その「子々孫々」が、「寺家要人」たる俗役集団として、日常的な寺家経営を担う。この俗役は、上司（政所・公文所）と下司（造寺所・修理所）という寺家経営組織が様々に変遷した。平安院政期において「上司職掌」は大仏供を備え、宝蔵辺りに侍した。下司職掌は造寺の機能と「歌舞音楽之曲」により諸会に供奉する機能を果たすことになった。鎌倉後期には「上司職掌首」は東大寺八幡神主が、「下司職掌首」は楽人を輩出する狛氏が相承し、各々「神人」と「公人」の首座にあつて、寺役に携わっている。「下司」（修理所）のもので「造寺」に関わるという由緒をもつはずの下司職掌は、現実には下司と直接の関係をもたず、楽人・舞人等に対する呼称として、寺内に定着するようになった。

中世後期においては、上司は神主から、下司は楽人から転害会の所役がでたものと思われ、日使は公人Ⅱ下司より勤仕した。

転害会当日の早朝、神前における悉奏（七僧）法会の儀をもって始まり、この後転害門への行列がある。『東大寺雑集録』所収の文明一四年（一四八二）の行列次第によると、日使は「上下ノ使二人乗馬長物傘」という春日若宮祭礼の日使と似た姿で九番目にお渡りをする。『永正二年手書会記』の上・下司は上・下使のあて字であらう。神幸と還幸の順序は以下の通りである。

八幡宮―大仏殿中門―南大門―国分門(西大門)―中御門―転害会ニ神幸

転害門―大仏殿中門―八幡宮ニ還幸

神輿が八幡宮に還御した後、御神体が神殿に入御する前にも諸々の神事が行われた。そのようすは、長祿元年(一四五七)「転害会日記」⁽²⁰⁾にこのように記されている。

一、還御成御前ノ次第

一番官幣(後略)

二番政所幣(後略)

次 宣命(後略)

次 転供(後略)

次 ヒノ使神主殿テンクウノ御供御申アテ、キナヲラセタマウ時

分ニ神人サエノキハエ出、コレヲマ子ク

次 上下幣(後略)

また、同年の長祿元年(一四五七)「東大寺八幡宮祭礼目録」⁽²¹⁾にはこのように記されている。

一、還御成テノ事

楼門ノ中程ニ勅使ノ疊一帖敷、同ク勅使御タチアリテノアトへ、ヤカテ御寺務ノ御ナヲリアリナリ、勅使ハ官幣、御寺務ハ政所幣ニテ沙汰アルナリ、次ニ転供ノ御供マキル、御輿所ノミサキ一社ニ一人ツ、マイル、次ニヒノ使マイル、同ク上下ノ御番マイル、

(後略)

天文八年(一五三九)の「転害会」⁽²²⁾ではこうである。

神人衆還御御トモ申。拝屋ニ御輿ヲスエ還御アツテ後、拝殿江カヘリクツヲハキ、ヤカテ八乙女ト同道シテ出仕ノヤウハ、南ノ廊ヨリ入テ大宮トノ水垣ノキワヲトヲリ、武内トノ前ヲ西江ニキテ下ノギリイシノ上ニ、北ノ方ニ東カシラニ八乙女衆ヲハシメテ神人モ出仕ス。⁽²³⁾ 転供ニタツキンキ也。神供一^(転供)テンクノ御供ロウモンヨリ入テマイル。ヒノ使以下スキタイサンス。^(退散)

以上の三史料により、還御の儀礼で日使が転供の御供と上下幣に関与していることがわかる。この場面を描いた絵画が、手向山八幡宮蔵「転害会図絵巻」三卷(安永五年(一七七六)写)の巻一(図5)であり、これは『統群書類従』所収の「東大寺八幡転害会記」[文明一四年(一四八二)](図6)と同じ原本による写しである。

『転害会図絵巻』巻二は、権神主紀延興が文政四年(一八二二)に諸本を校合して写したものである。この巻二には、八幡宮から転害門までの神幸が描かれている(図7)。上使・下使とも、随兵二人・礮・傘持・稚児一人等の九人構成である。

先述した『永正二年転害会記』にはまたこのようにも記されている。

一、上下頭御幣持之事。上司方ヲハ大炊役也。下司方ヲハ七堂・戒壇ノ堂童子二人シテ替々致其沙汰也。戒壇之堂童子二人清盛、フサヤ弟、清民、ツ、ヤ、今度清民、聊以内儀構私曲之儀申事在之、自今已後ハ任上衆次第二人シテ替々可随其役可加下知者也。聊以不可有最眞偏頗者也。

下司(下使)の稚児は七堂・戒壇ノ堂童子が勤めたようである。



图 5



图 6



『八幡宮七僧法会御祭日式』⁽²³⁾には上下使の後方が(図8)のように描かれている。
 東大寺八幡宮転害会の日使は、室町期には一四の頭役の一つであったが、これは東大寺に属する右舞人山村氏などが勤めたものと思われる。前述『手転会図絵巻』などには、十列楽人と一組に描かれており、手転会における日使も楽人の風流と考えられよう。



図8



図 7

三 離宮八幡宮日使頭祭

大山崎の離宮八幡宮は天王山南麓に位置し、「油の神様」として知られている。それは歴史的な背景によるもので、当社付近の住民が室町時代まで、対岸の石清水八幡宮の神人として、油座を結成していたことによる。

当社と石清水八幡宮との関係は、『石清水八幡宮護国寺略記』によると、以下のようである。⁽²⁴⁾ 石清水八幡宮は貞観元年（八五九）僧行教が豊前宇佐から勧請したが、宇佐より上京の途中「山崎離宮之辺」に寄宿し、示現を受けて男山の地へ奉安した。石清水八幡宮の内殿灯油を調達していた石清水八幡宮の神人は、平安時代後期以降、山崎を本拠に神人という身分によって関所勘過などの特権を受け、しだいに商業活動を始めるに至った。鎌倉幕府、室町幕府も神人の特権を保証した結果、神人は灯油の原料である荏胡麻を優先的に仕入れ、海路・陸路とも津料・関料を免除され山崎に搬入し、油器（油木）とよばれる独自の製油器で油に搾り、一〇カ国に独占的な販売権を持った。

こうした特権の代償として、神人は日々の内殿灯油を納入するほか、石清水八幡宮の日使神事の頭役を勤仕したのである。

貞和四年（一三八四）二月四日の社司紀則孝による『離宮八幡宮御遷座本紀』には日使神事の起源がこのように記されている。⁽²⁵⁾

同（貞観）十八年正月十五日夜、行教・御豊兩人夢爾日輪二津現治神童有氏

諒寛天曰波久、吾此所仁跡於垂留事十八年、然爾今一体分身乃形於以氏一津波男山
 兩移理、亦乃一津者此宮爾鎮利永布流爾天地止齊德志天下於守護止乃蒙瑞夢、則
 奏聞、朝廷、故四月三日勅右近衛少將兼備前宇藤原朝臣山蔭、男山奉勸請、
 然間例歲先離宮八幡宮差下勅使、給官幣、終後男山參向是旧例也

(中略)

然四月三日勅使、治承四年依兵乱難叶、社職神官為勅使少將代可執行旨被
 宣下、故爾來社職神官交々勤仕之者也

貞観元年、宇佐より八幡宮勸請の際、山崎の地に留まること一八八年に
 及んだ。貞観一八年(八七六)、行教・御豊両人の夢に、日輪が二つ現
 れ、神童がこう言った。我はこの地に一八年滞留している。一体の分身
 を男山(石清水八幡宮)に、今一体はこの宮(離宮八幡宮)に鎮座する。
 この夢を朝廷に奏聞してところ、四月三日に勅使が男山に勸請した。こ
 の由緒をもって、毎年の祭では、先ず離宮八幡宮に勅使が派遣され、官
 幣を奉じ、次に男山に参向するのである。四月三日の勅使参向は、治承
 四年(一一八〇)の兵乱のため困難となり、以来社職と神官が勅使代と
 して、交代で執行し、現在に至っている。

明応四年(一四九五)三月の紀則吉による八幡離宮遷座に関する記録⁽²⁶⁾
 も、前史料と類似した記述である。

同貞観二年^{庚辰}二月九日夜、自離宮兩輪耀出現、一輪遷座男山、依是勅使木工
 権頭從五位下私氣尋範同四月三日男山遷宮、其儀式今之日使也、日使者八幡
 宮為第一神事、号山崎根本生得神人祭礼者、治承三年迄為勅使祭礼、依同四
 年乱退転刻、芹壳瓦屋関戸依被成勅裁以来、在地之神事勤之、然間交野土民
 為御先役、号須弥寺捧白杖、自鳥羽木津等村年頭馬長役御子舞人次第司藏人

司先行色掌人吹笛打鼓、是者忝鹿島明神御振舞也、(中略)神事勤使者在古
 之勅使代也、於五位川拜大神宮并北闕長者宿院、於高坊田植成業、檢非違使
 火長督馬等堅門、日使勤者長者御山迄騎馬、御殿外廊三返打廻、龜山院御参
 籠時、神慮有御許、乘馬可仕勅定之上者無退転事也、

前史料と異なる記述は以下の点である。日使頭人は山崎根本生得神人
 が勤仕し、治承以来、在地の神事になった。交野の神人が御先役として、
 須弥寺と号し白杖を捧げた。鳥羽・木津の神人よりも、諸役を勤仕し鹿
 島明神へ芸能を奉納した。日使と長者は男山山上まで騎馬で参り、御殿
 の外廊を三辺廻った。

文永一二年(一二七五)成立の『八幡宮年中讃記』⁽²⁷⁾は、石清水八幡宮
 の年中行事記であるが、四月三日条にはこのように記されている。

礼奠者自山崎^{弁備}、素飯堆^{于宝前之机}、饗膳者^{于宮寺}、経営、珍味深^于
 盃中之羹、満座羞^訖、諸衆見物、(中略)其明年之祭使差定而退出云、
 (中略)

又臨^{晚陰}有^日使、相引^来自^{山崎}之孤村、儀式同^{于京洛}之大臣、隨身策^馬
 其^蹄如^龍、雜色装束、異彩飭新、爰主人冠間、懸^{紫藤}而^{嬌娜}、舞男
 巾子、挿^{素桜}而^{鮮妍}、彼等乍^{騎馬}、三般先廻^{神庭}、令^{下馬}、一面相對^{御殿}、各刷^再揮之衣袖、互^勤九度之酒盃、即^差来年之頭人^{罷出}畢、

儀式は「京洛之大臣」に同じであり、石清水八幡宮本殿で来年の頭人
 を差定する儀礼が中心であったようである。

室町前期成立の「年中用抄」⁽²⁸⁾上冊の四月三日条は、永享九年(一四三
 七)の行事について記している。

四月三日、渡物式月 永享九、村次第

トハノ事也
大山崎、木津、橋本、山馬長

巫女次第、府生二人、勾当、後大夫、宣事職事、三権一、惣一

馬長次第、善法寺、政所、同、權別当
童村、楽岐、楽岐、花村

渡り物は、村次第・巫女次第・馬長次第にわかれており、大山崎・木津・橋本の神人が村次第を勤めたのである。

以上の史料は、日使神事自体については断片的であったが、近世初期成立の『石清水八幡宮離宮八幡宮御旧記』⁽²⁹⁾には日使頭役勤仕の様子が詳述されている。

頭人館には前斎とて去年より門内に神明を勧請し惣忌をいたし、同霜月に八王子山の頂にて大山祇を祭り、種々の魚物を備献し第に銭を結び付、贖物となし茅の輪を貫侍る、是を号縁祓、惣長者侍之、致斎には從兼日神を指御札を立、撰津国尼崎浦におゐて身曾貴祓を勤、勾当者湯立の作法神舞有り、勾当淨衣立鳥帽子千早、かけて神に輪を懸舞、頭人者、毎日本宮に進み神拝す、諸座の出仕殊に交野の和市、楠葉の検知、終夜饗応あり、当月には十二間の松屋を設、座敷天井を金欄綾を以て包まとい、五色の糸にて結びたれ、柱に色々の模様を画、毛氈を敷、古代種々の饒物を並、頭人者日のよそひに太刀帯笏とり座上に着す、惣長者日の事也、
(中略) 大使者藤花を挿頭し唐鞍かさり大房を懸馬乗、此馬將軍より蓋并、警固役人出ル也、於于五位川萩殿、大神宮北闕拜する事者、帝徳風和にして塵埃動す、天長地久を祈り侍る、是より神事奉行役人の交名を説、列を引、神大幣野太刀虎皮長柄の拘神馬を先とし隨身滝口蜜絵面々心ことに立、金欄綾の装束取結び供奉し大路を渡り、松屋の前にて酒を酌、頭人の内室山吹麴の撰束餅の袴胡、瓶より酒を酌、名々に給り録を引、(中略) 扱大川に臨て錦の纜を解き花舟ハ五廻に掉さし河上の具船中の遊宴橋本に着く、
此所の渡り課役の舟四十八艘出ル、舞人有衆、諸役人舟より下り騎馬にて行儀を粧、男山の下宿院に着き、科手乃門より頭人を始供奉の人々馬上にて庭上を打通る、此所左右の側に諸國の人々棧敷をかく

まへ見(中略) 大使長者山上にて馬乗其外供奉の人々ハ步行にて攀登り神馬を牽、神殿廻廊三返周市す、龜山院之御宇文永十年四月三日の御神事に馬場殿を御所として御覧、殿下諸臣殿上人着座北面御隨身階下に例して見物す、長者ハ成恐下馬せむとするに時刻移りければ此旨を奏し奉る、昔時神託にて御免の上者今更不可有其恐とて御許容ありしかハ、馬上にて前渡りする事先規の例とは云ながら當時の面目也、扱棧門より下馬し大使番首たかく広前に進ミ奉幣俗別當諱辭、頭人退て胡床に座袍の袖を繕ひ笏にて再拝す、神主出て御幣を神前に備、此時内陣より一行事九度の土器を持、二行事銚子を取り、三行事提子、頭人に神盃をすゝむ、其已後一行司頭人の挿頭の花と土器をとり社に納、誠に大古の敎使を敬崇する駄の遺法也、此間に式正の御神楽あり、長者六人其外役人東西の座したる駄、傍若無人の作法也、案主者供奉役人の交名并来頭の名乗等をしるし、神前に向ひ一揖してすゝぬれば各々退下、頭人者館に帰り後斎いミしく勤侍る

頭人は前年の四月三日に差定され、門内に離宮明神の神明を勧請し、物忌の生活を送る。当年の四月に入ると、松屋という一二間の祭祀施設を作り、頭人は「日のよそひ」の姿であった。祭当日、対岸の橋本まで船で渡り、男山の下宿院より、騎馬で行列する。文永一〇年(一二七三)の神事には、龜山天皇が見物に来ていたが、日使は神託により御免の者といひ、騎馬のまま天皇の前を渡ることを許された。

日使頭役勤仕の宗教性としては、『八幡愚童訓』乙本下巻「三不浄事」があげられよう。

建治年中(一二七五―七八年―福原註) 四月三日の「日」使いにあたりし者、山門に身を入れて難渋しける程に、遂にまけて日使をつ

とめたりしか共、神事違例の咎のがれがたかりしかば、程なく一家悉く病死にて其跡あら畠となり、財宝は他人の物となる。

日使頭人に差定された人が、石清水八幡宮神人より日吉社神人に「身を入れて」、頭役を逃れようとしたが、ままならず、頭役を勤仕した。八幡宮への信心もなく、一家悉く病死した、という説話である。

日使になると、八幡宮造営料を寄進する等の経済的負担は重かった。寛正五年(一四六四)二月には、日使役難渋のため、八幡宮社頭に閉籠を企てた神人がおり、後花園がその退散を命じる院宣を下している。

石清水八幡宮日使役、近年難渋之事、明春厳密可被仰付之上者、念可退散閉籠之旨、可被下知者、院宣如此、仍執達如件

(四六四)
寛正五年十二月七日

当宮検校法印御房

右中弁□(花押)

細川勝元はその日使頭人の訴えにつき、湯起請で解決しようとしていた。⁽³⁰⁾

以上、日使神事には田楽・馬長・細男などの芸能が行われ、神幸行列において日使とともに渡る。日使は、春日祭の日使のように、平安末期までの勅使参向の再現であり、日使神事は勅使の遺法という説明がなされている。

日使神事は、石清水八幡宮側では男山への八幡宮の遷座という神話の再現、離宮八幡宮側では朝廷の勅使参向の再現という意味をもっていたものと思われる。

四 宇治田原三社祭

京都府綴喜郡宇治田原町の祭を三社祭といひ、⁽³¹⁾この祭にでる細男については以前検討した。⁽³²⁾この三社は、大宮神社、御栗栖神社、三宮神社である。この地には、家株による宮座があり、祭礼はこの座が主体となつて行われる。宮座には一族座と舞物の座がある。

一族座には一座あり、舞物の座は声翁座、王鼻座、田楽座、獅子座の四座である。

近年祭日は一〇月一〇日になったが、古記録では旧九月九日の重陽の日であった。筆者がみた時は、一〇月一七日が祭日であり、一四日に三社の神輿が旧田原村の大字郷之口小字紫坊にある御旅所まで神幸し、仮宮に駐輦する。一七日には、一族座のうち、田原一族座と荒木一族座を除いた九座が三組ずつの組を三つ作り、それぞれが三回ずつ、北から南へ馬駆けを行う。この後、神前で舞物座による声翁、王鼻、田楽、獅子の芸能がある。この後、再び三度半の馬駆けがある。この後、日使と呼ばれる荒木一族座のものが、黒装束で乗馬のまま大幣を三度振る。これを日の迎えといい、ついで神職の祝詞のあと、三基の神輿は遷幸する。

井上頼壽が書き留めた明治以前の日使の伝承は非常に興味深いものである。⁽³³⁾

『日ノ使』とは、荒木一族座から勤める役で、毎年二名宛順番に当る。日ノ使は九月朔日の一週間前から火を忌み心身の清斎をする。

乗る馬も亦清戒する。五日前には御湯を上げて家内を清め、朔日と九日には、日ノ使二名が白丁姿で立烏帽子を戴き、内の頭一名は太刀を佩き行騰を穿く。他の一名は歩行で後方に控へ大幣を奉持する。大幣は長さ一丈許りの竹三本を所々結び、先に日丸扇の開いたもの三面を円形に組んで取附けたものである。其所へ厚紙廿枚を月の数に切って『ぬさ』とて附け、紙に包んだ白米三括を附ける風習となっている。二名共顔に白粉を厚く塗り、額と両頬には紅点を打つ。

日ノ使になる役は祭の三日前から固形物のみを摂取し、茶や水は固より液体は一滴たりとも飲む事を許されない。祭の日は晴天に馬に乗り終日姿勢を端正に保ち、太陽に正面し其の移行に随って廻らねばならなかった。一憩も出来ぬ苦しさは目方の激減する程辛かったと云ふ。一説に日ノ使は黒袍を着けたとも云ふ。

この伝承によると、日使は終日姿勢を端正に保ち、太陽に正面しその移行に随って廻らねばならなかった、という。まさに日使Ⅱ太陽の使いであった。

井上が聞書した伝説⁽³⁴⁾によると、太古に田原郷双栗荘岩本の大岩嶽へ、双栗神社、建藤神社、湯原神社、大宮神社、一宮神社が降臨した時、荒木一族と田原一族が奉仕した、という。この謂われから、この両座は祭礼において、神に何も奉獻しない。伊東久之は、この両座は、祭礼では奉仕する側でなく、招かれる座であるという伝承を記している。⁽³⁵⁾また、この両座は江戸時代には、「侍」とよばれた。古くは三社の正遷宮の際に、奈良高畑から金春太夫をよんで「法堅め」の式を行ったが、この時

にも両座は特別の棧敷位置をもったという。伊東は、以上の歴史的背景より、この両座に開発領主的な側面を指摘し、「日使」を神主にも相当する役と解している。⁽³⁶⁾

宇治田原において、日使は田楽・王の舞・細男・獅子舞・競馬と一連の芸能構成であった。しかし、勤仕者や祭礼における役割は、他の芸能と一線を画した存在である。

おわりに

以上、春日祭・春日若宮祭礼、東大寺八幡宮転害会、離宮八幡宮の日使神事、宇治田原三社祭における日使を検討してきた。宇治田原以外の事例に共通していることは、日使は勅使、勅使代、奉幣使であった。春日や東大寺においては楽人の風流であった。宇治田原において日使が神聖化したのは、これを勤めた荒木・田原一族の性格によるものである。

本稿で検討した各日使の伝播過程の問題は今後の課題としたい。

註

- (1) 「祭礼を飾るもの——一つ物の成立と伝播——」『国立歴史民俗博物館研究報告』四五集、一九九二年。「神事芸能の細男について」『国立歴史民俗博物館研究報告』五〇集、一九九三年。
- (2) 「おん祭の歴史」『春日若宮おん祭の神事芸能』一九八二年。
- (3) 同右、一〇頁。
- (4) 『奈良』社寺の都、四興福寺の全盛、一九六三年。

- (5) 「日頭の神祭と内外の芸能」『祈りの舞―春日若宮おん祭』一二〇頁、一九九一年。
- (6) 永島福太郎前掲書。
- (7) 大東延和氏の御教示による。
- (8) 『芸能』三二―七、一九九一年。
- (9) 同右。
- (10) 同右。
- (11) 前掲論文、一一頁。
- (12) 岡本彰夫「日使は子供だった」二三頁、(春日四方山話〔4〕)『春日』四四号、一九八九年。
- (13) 同右、二一―二二頁。
- (14) 同右、二二頁。
- (15) 同右、二二頁。
- (16) 和田義昭「東大寺鎮守手擧会について」『中世の権力と民衆』一九七〇年。
- (17) 『日本庶民文化史料集成』二卷(田楽・猿楽)、一九七四年。
- (18) 前掲論文、四四二頁。
- (19) 『中世東大寺の組織と経営』第三章、第一節、五「俗役」、四六六―七頁、一九八九年。
- (20) 和田前掲論文に紹介。
- (21) 同右。
- (22) 『日本庶民文化史料集成』二卷(田楽・猿楽)、八二頁。
- (23) 『大系日本歴史と芸能』四(中世の祭礼)、一九九一年に掲載。
- (24) 『京都府の地名』(『日本歴史地名体系』二六)、一九八一年。
- (25) 『大山崎町史』史料編、一九八一年。
- (26) 同右。
- (27) 『石清水八幡宮史料叢書』四(年中行事服忌社参)、一九七三年。
- (28) 同右。
- (29) 『大山崎町史』史料編。
- (30) 『離宮八幡宮文書』年末詳七月「細川勝元書状」『大山崎町史』史料編所収。
- (31) 伊東久之「宇治田原三社祭の芸能」『京都の田楽調査報告書』一九七八

- 年。
- (32) 前掲「神事芸能の細男について」。
- (33) 『京都古習誌』一九四三年。
- (34) 同右。
- (35) 前掲論文。
- (36) 同右。

(国立歴史民俗博物館民俗研究部)

On 'Hinotsukai'

FUKUHARA Toshio

Up until now the writer has studied Saino-こ, one of the ritual arts, and has ranked it as one of the series of arts that came into existence in the later Heian Period and was comprised of Dengaku, *Ō-no-mai*, Shishimai, Totsura, Miko-Kagura, Kurade-uma, Yabusame, Kagura, Bugaku, Mikowatashi, etc. In the festivals of the ancient shrines of Kyōtō and Nara, there are instances where a character named 'Hinotukai' participates in the festival together with those named above.

Preceding research into the Hinotsukai has been confined to the Kasuga Wakamiya Festival, in which its sanctity has been pointed out. This is because the Hinotsukai, dressed in a formal black overgown (*Hō*) and long trailing hakama, played a major part in the offering, and showed no artistic behaviour. This paper deals with the Hinotsukai participating in the Kasuga Festival, the Kasuga Wakamiya Festival, the Tōdaiji Hachimangu Tegaie, the divine services of the Ōyamazaki Rikyū Hachimangu, and the Yamashiro-Uji-Tahara Triple Shrine Festival. The results of a study based on historical materials and folklore show that what the Hinotsukai in each case share in common is that a line can be drawn between this and the other artistic, elegant dancing; and that while it has become more refined, the religious element can be strongly felt.